

第一次及び第二次集団理論の検討

— 集団類型分類基準に関する一考察 —

小 笠 原 真

一

C・H・クローリーが好著『社会組織』(Social Organization)をものし、その中で「第一次集団」(primary group)という概念を提唱したのは、一九〇九年であるから、既に今日迄に半世紀余りの歳月が流れたことになる。その間の第一次集団の概念は、K・ヤング、F・S・チューピン、R・E・バーク||E・W・バージェス、T・M・ニューカム、G・A・ランドバーク、E・E・ユーバンク、L・L・バーナード、E・フェアリス、K・デーヴィス等といったアメリカの社会学者や社会心理学者達によって、無批判的にしる批判的にしる広く受け入れられてきた。そして彼等の中には、「第一次集団」と対蹠的に「第二次集団」

(secondary group)乃至「派生集団」(derivative group)の概念を用いて、集団類型分類を試みる人々も多い。それ故筆者は本稿では、先ずクローリー、ヤングの所論を逐一吟味する過程を通して、第一次集団及び第二次集団の両概念の意味内容を幾分なりとも浮き彫りにし、次いで集団類型区分を試みる人々(チューピン、ニューカム、ランドバーク、ユーバンク、バーナード等)が如何なる集団特質(characters)若しくは属性(properties)をメルクマールとして、第一次集団と第二次集団の区別をしているかをひそかに探ってみ、続いて第一次及び第二次集団理論に対して、従来どのような問題点・疑問点が提起されてきたかを若干検討し、最後にクローリーの第一次集団、及びその後対立概念として用いられるようになった第二次集団、F・テンニース

の共同社会 (Gemeinschaft) と利益社会 (Gesellschaft)、R・M・マッキンバーのコミュニティ (community) とアソシエーション (association)、といったこれ迄社会学界では支配的であった二分法的な集団類型学が有している限界を指摘し、そのあと新しく登場してきた多元的な且つダイナミックな集団類型学の試みを二、三紹介しよう、と企図するものである。

なお予め断わって置きたいことに次のことがある。すなわち、今日「第一次集団」の概念よりも、むしろ「小集団」(small group) という概念が、しばしば社会学者の口に入るが、本来の第一次集団の概念は、第二節以下でも具体的に考察するように、それがパーソナリティ(特に道德意識)の形成過程における機能に重点をおいた実体概念であるのに対して、最近における小集団の概念は、直接的接触を保つ少数者からなる集団が、より大なる組織の中で果たす機能や、その内部におけるダイナミックスを研究するための操作概念としての性格が強い点で、両概念は明らかに異なる。従って筆者にとっては、小集団理論の研究は他日を俟つとして、ここではただアメリカの小集団研究には、概括的にいって次の二つの方向があることだけを付記しておく。

第一の方向は、小集団内部の心理的力学を明らかにしようとするK・レヴィンを先駆とするゲシュタルト心理学 (Gestalt psychology) や、J・L・モレノがはじめたソシオメトリー (sociometry) の学派であつて、彼等は児童や未成年者が学校やクラブでつくるグループの研究に発し、集団のメンバー、特にその指導者のパーソナリティを研究した。そして現在では、更に大きな組織例えば工場、官庁、軍隊等の内部における成人の研究も行なつて第二の方向に近づいている。第二の方向とは、フォーマルな組織 (formal organization) 内の小集団の機能を明らかにしようとするG・E・メーヨーの研究の線で、工場労働者のインフォーマルな行動様式と社会関係が研究された。レヴィン派の研究がメンバーの役割、任務の性質あるいは個人的特徴など集団の内部的要因に集中し、集団のおかれている外的状況にはあまり目を向けなかったのに対して、メーヨー派は集団と外部的なフォーマルな組織との関係を問題にした点で研究方向を異にしている。^①

① 福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』において、大橋幸氏が摘記している「第一次集団」の項参照。

② 田中清助「第一次集団論序説——マルクス主義的理解の前提として——」『思想』昭和三十一年、七月号、五六頁及び青井和夫『小集団』昭和三四年、八一〇頁参照。

二

本稿の冒頭でも記したように、第一次集団の概念は、ク

リーによって古典的な公式化が行なわれているので、先ずわれわれは彼の所説をみることからはじめよう。クリーに從えば、第一次集団の特徴は「親密な face-to-face の結合 (association) 及び共同 (cooperation)」(I, p. 23) のうちに見い出される。「それはいろいろの意味で第一次的であるが、個人の社会性 (social nature) と理想 (ideal) の形成にとって、根本的意義を有するという意味において第一次的である」(I, p. 23)。親密な結合の結果は、心理学的にいつて、諸個人を一つの共通した全体の中に融け込ませ、そのために集団での共同生活とその目的が個人の自我そのものとなるのである。「恐らくこの全体性を表わす最も簡単な方法は、それは『われわれ』(we) という表現である」(I, p. 23)。つまり「それはある種の共感 (sympathy) と相互同一視 (mutual identification) を含むもので、『われわれ』という言葉はその自然の表現である」(I, p. 23)。彼はこうした結合及び共同の最も重要な形式として、家族集団 (family)、児童の遊戯集団 (playgroup of children)、近隣集団 (neighborhood) —— の近隣集団は、厳密に言えば「J・ラムネーと」・メイアーが指摘している古い馴れ染めの近隣集団であつて、近代的な大都市におけるそれは、多くの場合第一次集団としての性格を失っている——を挙げ (I, pp. 24

—32)、これ等はいずれも「人間性と人間理想における普遍的なものの主要な基礎である」(I, p. 24) と考え、「われわれをめぐる世界における人間性の苗床」(nursery of human nature) (I, p. 24) と呼んでゐる。これ等の集団は「個人にとつてのみでなく、社会制度 (social institutions) にとつても生命の源泉である」(I, p. 27) が、それを含む包括的な社会がどうあろうとも、ある程度までそれからの独立性を保ち、人間を一定の方向へ形成して行く、とクリーは考えるのである。なおクリーの意味する人間性とは「特に共感を意味するが、また愛、怨恨、野心、虚栄心、英雄崇拜心及び社会的な正・不正の共感の加味されている無数の情操 (innumerable sentiment) をも意味する」(I, p. 28)。そしてそれは「すべての社会を通じてある程度まで同一な単純な face-to-face の集団、すなわち家族、遊び場、近隣のような集団のうちで育ち、且つ表現されている性質である」(I, p. 30) と彼は理解してゐる。

E・デールケームは『社会分業論』(De la division du travail social) 第二版序文で、アノミー (anomie) と云うのは、家族や古い同業組合が遺物となり、共同生活が無規制状態にたち到了た事態を意味すると述べている。彼はこのアノミーの克服のために、全国的な職業別集団をつくり、個人に疎隔した国家との中間にあつて、経済的機能以外にも人々を結合連帶

させる機能をもたせ、教育活動を行ない、審美的機能までも持たせたプログラムをたてたことは知られる通りである。ところで、デュルケームのこのプログラムとクローリーの右に見てきたような意味内容の第一次集団とを対比させる時、第一次集団は必ずしも経済的機能をもたないにしても、両内容は極めて近い関係にあるといえよう。それ故田中清助氏の如きも「アノミー論と第一次集団の研究とは、けっして無縁ではない」と指摘している。しかしながら本稿での私の企図するところは、既述のように第一次及び第二次集団理論の検討を通して、集団類型分類基準を探ろうとしている点にあるので、アノミー理論の検討はここでは差し控えることにする。

さて、右の考察からも幾分かは明らかのように、クローリーによって提唱された第一次集団の基本的な特質若しくは属性として、従来、(一)成員の間に見られる face-to-face の接触(接触の仕方)、(二)成員の親密な結合及び共同(結合のあり方)、(三)成員(人間)の社会性と理想を形成するための根本的な集団(集団の機能)、の三側面が特に強調されてきたように思われる。そして我が国では、彼の第一次集団を最もよく性格付ける側面として、クローリー自身が確かに第一次集団を face-to-face groups とも呼んでいるところから(1, p.30)、それを第二の成員間に見られる face-to-face の接触(接触の仕方)に求めている人々が多いけれども、私はそれを第二の成員の親密な結合及び共同(結合のあり

方)に求めてみたい。何となれば、クローリーはメンバーの face-to-face の結び付きを、別に heart-to-heart life of the people と表現しているが(1, p.25)、これは彼が第一次集団の特徴を、単に「距離」とか「接触」とかいう物理的近接性(客観的側面)に求めたのではなく、むしろ「顔」とか「面」とかいう概念にまつわる主観的側面に求めたためであろうと考えられるからである。更に私をしていわしめれば、クローリーにあっては、少なくとも成員の face-to-face の接触は、彼等の親密な結合及び共同を生む条件の一つであると考えられているようである。そしてこの成員の親密な結合及び共同が人間の社会性と理想を形成せしめる働きをする我等感情(we-feeling)を生む母体であると考えられているように思われる。

これに対して、第二次集団という概念は如何なる意味内容のものであろうか。第二次集団は、クローリー自身にあっては、少なくとも第一次集団のように正面からは取り上げられていないし、またかかる名称も、フェアリスも指摘しているように(12, p.42)、決して彼の口から発せられたものでもない。従って「第二次集団」というタームは、後になって他の学者——大橋氏の言によれば恐らくヤング——が第一次集団と対置させるために造り出したものである。

さて、第二次集団は近代的交通・通信技術を前提とする間接的接触(indirect contact)を必須の条件としているために、成員の間には親密感や全体的な感情もおのずから薄くなる。更に第二次集団は「第一次集団よりもはるかに意識的に組織されている事実によって特徴付けられている。

その組織は多かれ少なかれ十分に認識された共通の利害関心の存在にもとづくものである。これはしばしば『利害関心集団』とも呼ばれている」(2, p.23)。要するに第二次集団は、本来の目的ではなく他の目的のための手段であり(4, p.19) この点でマッキーバーのアংশェーションすなわち類似的関心及び共同的関心の一つ若しくは若干の関心を共同的に追求するために組織された関心意識的統一体(interest-conscious unities) (3, p.215)と符合している。

第二次集団は時には「派生集団」(derivative group)あるいは「特殊利害関係集団」(special-interested group)とも呼ばれているが、その主要な形成としては、国家(state)・政党(political party)・職業的集団(professional association)・大きな官僚的団体(large bureaucratic corporation)等が挙げられよう(4, p.19)。

なお第二次集団の特質若しくは属性についても、ここで概括的に述べてみると、先に挙げた第一次集団の三つの基

本的な特徴とは、反対のもの、乃至はそれを補足するものである(4, p.18)。つまり、第一次集団においては成員の接触がface-to-faceであるのに対して、第二次集団でのそれは、tough-and-goの接触であり(15, p.302)。また第一次集団が成員の親密な結合と共同及びそれに伴う我等感情といった情緒的・感情的側面にその特徴を有するのに反して、第二次集団はメンバー各自の充分に計算された利害関心によって結び付いた集団である点で合理的・理性的側面にそれを有し、更には前者が人間の社会性と理想を形成するための根本的な集団であるのに対して、後者はかかる点では派生的な集団である(11, p.411ff.)とったように。

以上われわれは第一次集団及び第二次集団の両概念の意味内容を、主としてクリーリー、ヤングの所論を検討する過程を通して、明らかにしてきたが、その際、クリーリーは第一次集団を親密な結合及び共同によって特徴付けられる集団として捉え、第一次集団と区別される集団を機能的・合理的集団として把握していた——この点に関してはこの節の註四で述べているから参照されたい——が、このような集団類型区分は、結局のところ集団構成メンバーの結合のあり方(特にその質的側面での差異)に分類基準を求めたものと考えることが出来よう。ところで、このようなクリー

一流の立場と極めて近いものに、われわれはテンニースの共同社会と利益社会の社会集団類型を想起するのである。彼によれば共同社会は「持続的な真実の共同生活であり」(5, S. 5)、「実在的な有機的な生命体 (reales und organisches Leben)」(5, S. 3)と考えられている^⑥。だからそこでの人々は「あらゆる分離 (Trennungen) にもかかわらず結合 (Verbundenheit) しつづけていく」(5, S. 40)。これに反して利益社会は「一時的な外見の共同生活であり」(5, S. 5)、「観念的機械的な形成物 (ideelle und mechanisch Bildung)」(5, S. 3)とみなされている。それ故利益社会では、あらゆる結合にもかかわらず依然として分離しつづける」(5, S. 40)のである。このようにテンニースの場合にも、確かに集団成員の結合のあり方——その質的側面での差異——を重視して、社会集団の類型区分が試みられている。

既述のように、クーリーの場合にもまたテンニースの場合にも、集団成員の結合の質的差異が集団類型分類基準として採用され、この点では両者は著しい類似を示しているけれども、しかしながら次のような大きな相違も見られる。すなわちテンニースによれば、共同社会と利益社会は、現実の経験的社会的諸現象を記述し理解するための手段・道

具である「規凖概念」(Normalbegriff)——M・ウェーバー流にいえば「理想型」(Idealtypus)——である(5, SS. 133—135)と共に、「歴史的な概念」としても把握されている。つまり彼は「事実としても名称としても、共同社会は古く利益社会は新しい (Gemeinschaft ist alt, Gesellschaft neu, als Sache und Namen)」(5, S. 4)とつづ、また「偉大なる文化発展のうちにおいて二つの時代が互いに対立している。すなわち、共同社会の時代に利益社会の時代が続いている」(5, S. 251)とも記述しているように、社会発展の方式——共同社会から利益社会へ——が明らかにされている。ところがクーリーの場合には、北川隆吉氏も指摘しているように、歴史的範疇としての意味が欠落しているのは明白である。この点でクーリーはテンニースとは大きな隔たりをもっている。しかしわれわれが第一次集団と第二次集団の両概念を考える場合には、規凖概念として理解すると共に、矢張り歴史的な概念としても解すべきではなからうか。というのは、ヤングが「近代社会はますます第二次的な、且つ制度化された集団によって支配されるようになってきた。家族、近隣関係、村落のような第一次集団は、われわれの社会における重要な集団としての地盤を失ってきた」(3, p. 26)と述べているように、第一次集団

(第一次関係)の漸次的衰退と、第二次集団(第二次関係)のこれに平行する漸次的支配とが、経験的事実としても明らかに becoming してきたからである。

① J. Rumney and J. Maier, *The Science of Society: An Introduction to Sociology*, 1963 (小口信吉・横飛信昭共訳『社会学』八九頁)。

② É. Durkheim, *De la division du travail social*, 4^e éd., 1922 (井伊玄太郎・寿里茂共訳『社会分業論』上巻、一一四七頁参照)。

③ 日高六郎・北川隆吉編『現代社会集団論』昭和三三年、九三頁。

④ 東京社会科学研究所編『社会学の基礎』昭和二八年において、桜井庄太郎氏が記述している「社会集団」の項(一四五頁)、新明正道編『基礎社会学』昭和三四年において、谷田部文吉氏が述べている「集団の諸形態」の項(一四八頁)、更には藤田義憲教授が『社会学概要』昭和四一年において、接触の仕方がつねに頻繁に反覆持続される仕方が否か、あるいは身近かに直接的に接触するか間接的であるかによって、社会集団を第一次集団と第二次集団とに分ける仕方がある。これはアメリカのクリーリーによって紹介された分け方であると記述している個所(四五頁)など。

⑤ クリーリーの著作には次のような表現はみられる。すなわち「都市においては、われわれは真に迫ったというよりは、むしろより機能的な個性を見出す。特殊化された集団 (specialized group) の形成にとつては好都合であり、専門的な能力を

養うにも好都合である」(J, p. 94)とか、「知識の容易な伝達は、孤立より生起する行き当たりばったりの変化から区別されるような合理的機能的な変動を促進する」(J, p. 95)といったように。従つてクリーリーの場合、第一次集団から区別される集団は特殊化された集団であり、それは合理的・機能的な集団であると考えられているようである。

⑥ 福武他編『社会学辞典』における「第一次集団」の項参照。

⑦ 同「第二次集団」の項参照。

⑧ H. P. Fairchild (ed.), *Dictionary of Sociology*, 1944, p. 135.

⑨ 北川隆吉「社会変動と現代社会学(中)——社会学における社会理論再構築の意味とその批判——」『思想』昭和四一年、六月号、一二二頁。

三

さて、クリーリーの第一次集団、及びその後対立概念として用いられるようになった第二次集団乃至派生集団の両概念を用いて、集団類型分類を試みる人々に、われわれはチーピン、パーク||バーヂェス、ニューカム、マッキーバー||C・H・ページ、クリーリー||R・C・エンジェル||L・J・カー、ユーバンク、バーナード等の氏名を列記することが出来る。それ故ここでは、彼等の所論を一瞥する過

程で、特に如何なる集団特質若しくは属性に、集団類型分類基準を求めているかをひそかに探ってみようと思う。

第一は、先に挙げたクルーリーの第一次集団の特質の第一の側面と符合するが、集団成員の接触の仕方が直接的に接触するか間接的であるかという点を強調して、第一次集団と第二次集団の別を設定する立場であって、チェーピン、パーク・バージェス、ニューカム等が挙げられよう。先ずチェーピンの説くところによると、第一次集団は「親密な接触集団」(intimate contact group)とも呼ばれ、日常直接にしかも頻繁に顔と顔を合わせる親しい人々の集団を意味するのであって、その典型的なものとして家族集団、遊戯集団、近隣集団、ギャング集団を挙げている。

これに反して第二次集団は「人為的接触集団」(artificial contact group)とも呼ばれ、ここでは人々は電信・電話、ラジオ、文書などを通じて、間接的にしかも稀にしか接触するに過ぎないところから、極めて非人格的な性格をもつ集団であって、例えば国会、地方議会、理事会のようなのものがそれである。なおチェーピンはこの二つのものの中間に位する「中間的集団」(intermediate group)も考え、これを「表面的接触集団」(superficial contact group)とも呼び、学級、キリスト教青年会の地方支部、

教会、クラブ等を例示しているが(6, p.162)、黒川純一氏も指摘しているように、何れにしてもそれが社会的接触(social contact)の仕方という観点から類別されたものであると考えられる。次にパークとバージェスも先ず社会的接触には、第一次的接触(primary contacts)と第二次的接触(secondary contacts)の別があり、第一次的接触はいうまでもなく第一次集団のメンバーの間に見られる接触と符合し、第二次的接触は第二次集団のそれと結び付くと考えるのである(7, pp.280—284)。次いで彼等は、第一次的接触を生活のあらゆる領域に亘って実際に見られる接触であり、具体的(concrete)・人格的な接触であり、愛情(affections)によって代表されるような接触である、これに対して第二次的接触を、生活領域でのある一点若しくは二点での接触であり、抽象的(abstract)・非人格的な接触であり、目的よりも手段を意味する科学や技術にあらわれる抽象性に基づいた接触である、と理解している(7, pp.284—287)。従って彼等は全面的・具体的・人格的・愛情的接触と、部分的・抽象的・非人格的・手段的接触との相違にもとづいて、第一次集団と第二次集団の別を考えていると云えよう。更にはニューカムも「われわれは第一次集団をもって、その成員の多少とも継続的な、対面的接触

を特徴とする集団を意味してきた。われわれは、第一次集団以外のすべての集団（単なる統計的集団や一時的な人間の集合を除いて）を第二次集団と見なすことにする」（『圏点筆者記』と記述しているが、これは明らかに接触の仕方という観点から両集団を類別したものである。

マッキーバーとページも、第一次集団と大きなアソシエーション（Great association）——これはS・ケーニツヒも指摘しているように第二次集団と置き換えてもよい——とを区別するに当って、集団構成メンバーの接触の仕方が面接的であるか否かを重視しているようである。すなわち彼等は、第一次集団をクローリーから借りた表現ではあるがと断って、face-to-face group と呼び（3, p. 230）、これに対して大きなアソシエーションを、その成員があまりにも多数であり、また余りに広く点在しているために、面接的関係（Face-to-face relationships）を通じては仕事の出来ない集団であると把握するのである（3, p. 219）。ただここで注意しておきたいことは、マッキーバーとページが第一次集団の概念で把握する範疇は、クローリーやチュービンが捉えるそれよりも、拡大解釈されており、彼等は産業組織におけるインフォーマル・グループ（informal group）をも含めている——この点ではL・ブルームとP・セルズニツクも同じである（13, p. 127）——ということである。

ところで、クローリーやテンニースなどは、インフォーマル・グループと呼ばれる集団がもつ重要な意義を認識せず、合理化され、ビュロクラシー化された近代的な大組織体は、その表

面から根底まで非人間化され、その内部にはたんに設備とフォーマルな秩序と、そしてばらばらのアトムの個々人だけが存在するかのようにならされたのであった。^④ところが、有名な「ホーソン工場の実験」（Hawthorne Experiments）の社会学的意義は、ある意味で「第一次集団の再発見」（rediscovery of the primary group）という言葉の中に最もよく集約されている。つまりこの実験は、古くクローリーによって指摘された種類の集団を、近代化された工場内の職場集団の中に見出し、その性質と機能を実証的に解明することによって、学界の注目を呼んだからである。一定の経済目的を達成するために目的合理的・没人間的に構成された工場の「フォーマルな組織」に対して、この集団は「インフォーマル・グループ」と名づけられたが、その本質は第一次集団と変わるところはない。それ故それは「親密な face-to-face の結合及び共同」によって特徴付けられた集団である。^⑤

第二は、前記の第一次集団の特質の第二の側面と結び付くが集団構成メンバーの結合のあり方に焦点を合わせて、第一次集団と第二次集団の区別を試みる立場であって、更にこれには集団成員の結合の量的側面を重視する立場と、その質的側面を強調する立場との別がある。前者の立場を採用する者にはランドバークがおり、後者の行き方を支持する人々には、クローリー、エンジェル、カー、ラムネー、メイアーがいる。

先ずランドバークの説くところを聞いてみると、通信手段の著しい発達のみられる以前においては、人々の総体的な相互作用は、地理的空間における近接性と不可分な関係にあった。その結果、成員が面接的であるか否か換言すればメンバーが肉声 (human voice) の届く範囲にいるかどうか、によって、第一次集団と第二次集団とを分類する傾向があった。しかしながら今日のようなラジオ・テレビの時代になると、かかる分類基準は明らかに不適当であると彼はまず考えるのである (8, pp. 310-311)。次いで彼は従来一般に用いられてきた二分法 (dichotomy) による集団分類は極めて不充分 (crude) なものであると考えられるから (8, p. 317)、それを採用することを止めて、第一次集団、第二次集団、第三次集団……といった連続的分類 (continuous gradation) を用いることにすると述べている (8, p. 311)。ところのは、彼が集団の本質を成員の相互依存 (interdependence) 乃至は相互作用 (interaction) であることみなすことからの自然の成り行きとして、集団分類基準にも成員の実感として懐く相互依存の程度、若しくは成員の間に実際にみられる相互作用の程度が採用されている (8, p. 316)。ところが彼に従えば、この相互依存乃至相互作用の差異は、社会的距離 (social distance) の差異

となり、且つ我等感情の差異ともなって顕在化してくると考えられる。かくして社会的距離や我等感情における量 (quantitative units) の差異によって、集団分類を試みようとする場合には、矢張り連続的分類が最も相応しいとランドバークは考えるからである (8, p. 310ff.)。しかしながらランドバークのこのような主張にも、遺憾ながら社会的距離や我等感情の量をはかる「標準化された尺度」がまだ用意されていないのである。

これに対して、クリー・エンジェル・カーやラムネー・メイアーは、第二節で見てきたようなクリーの見解を基本的に踏襲しているので^⑥ (9, pp. 70-78)、ここでは具体的な考察を差し控えるが、要するに彼等は第一次集団での成員の結合の性質を親密的・人格的・情緒的・感情的側面に求め、第二次集団でのそれを非親密的・非人格的・合理的・理性的側面に求めて、両集団を鋭く対立させるのである。

第三は、第一の接触の仕方と第二の結合のあり方との両分類基準を併用して、集団の類別を試みる立場であって、ユーバンクの次のような見解がこれに当たる。つまり彼に従えば、先ず集団成員の接触には直接的接触と間接的接触の別があり、前者すなわち直接的接触の優越している集団

に第一次集団と第二次集団が、後者の支配的な集団として第三次集団 (tertiary groups) が挙げられる (10, pp. 147-148)。次いで彼は成員間の親密さの程度 (degree of intimacy) に応じて、右の三種の集団の間を次のように区別する。第一次集団は親密な面接的關係 (intimate, face-to-face relations) が優越している集団であって、それはその心理的距離の程度によってさらに、(a) 最も深い愛情の絆によって結ばれている家族、(b) 家族以外にみられる個人的愛情 (personal affection) で結ばれている恋人、親友、(c) 熟知 (intimate acquaintance) 関係にある者の間で見られる集団例えは小学校のクラス、近隣集団、ギャング、に分けられる (10, p. 147)。第二次集団は面識がなお個人的ではあるが (acquaintance is still personal)、その集団構成メンバーの間が親しいとみなせないほど、偶然的 (casual)・形式的 (formal)・非常習的 (infrequent) な集団であって、その具体例には職業組織、商業組織、中学校以上のクラス、宗教上の集まり等が挙げられる (10, pp. 147-148)。第三次集団は個人的面識をまったく欠いたり、極めて僅かしかもたないような集団であって、政党、宗派、教派等が例示される (10, p. 148)。以上がユーバンクが説くところである。

第四は、先に挙げたクローリーの第一次集団の第三の特質と結合するが、集団のもつ機能つまり人間の社会性と理想を形成するための根本的な集団であるか、あるいはかかる点で派生的な集団であるかの点を強調して、第一次集団と第二次集団の別を考える立場であって、この立場はバーナードによって支持されている。彼が「第一次集団は、個人のパーソナリティや行動 (behavior) が極めて幼少の頃から選択されるところの face-to-face の組織体 (organization) である。これに反して派生集団は、個々人の面接的接触が支配的な組織体であろうと、あるいはまた間接的接触が支配的なものであろうと、根本的な第一次集団から形成されたすべての集団類型を含むのである。この区別はパーソナリティの完成 (personality integration) 過程に第一義的重要性を認めたものである」(11, pp. 411-412) と記述するのは、正しく右の立場を示したものである。

以上紙数の都合もあって極めて大雑把ではあったが、われわれは種々の社会学者がさまざまな関心と必要に応じ、その特殊な観点にとって関連をもつ特徴的な要素に分類基準を求めて、第一次集団と第二次集団の別を試みていたことを見てきた。従って今や、クローリーにはじまる第一次集団と第二次集団の別が、単に成員の接触の仕方が直接的で

あるか否かによって区分されたものであるという。これまでに社会学界で支配的であった見解は、確かにチェーピン、ニューカム等の限られた人々には妥当するものの、クリーリ、ランドバーク、ユーバンク、バーナード等には必ずしも当て嵌まらないことも判明した。

- ① 黒川純一『改訂社会学要講』昭和三〇年、八四—八五頁。
- ② T. M. Newcomb, *Social Psychology*, 1950 (森東吾・万成博共訳『社会心理学』五一—五頁)。
- ③ S. Koenig, *Man and Society*, 1957, pp. 210—211.
- ④ 尾高邦雄『現代の社会学』昭和三三年、二八九頁参照。
- ⑤ 福武他編『社会学辞典』における「インフォーマル・グループ」の項参照。
- ⑥ J. Runney and J. Maier, op. cit. (同訳書、八八—八九頁)。

四

クリーリ、ヤング、チェーピン等によって構築された第一次及び第二次集団理論に、われわれはこれまで比較的忠実に耳を傾けてきたけれども、彼等の所説に対して問題点・疑問点を提起する人々が決していないわけではない。例えばフェアリスは、クリーリに従えば、face-to-faceの接触は第一次集団にとって必要欠くべからざるものであると

みなされ、第一次集団は face-to-face groups と呼ばれているけれども、「第一次集団を規定するにあたって、面的という性質は本質的なものであろうか。すべての面的集団が第一次集団であらうか。」(12, p. 42, 13, p. 128)と問題提起している。そしてこのような問題提起の根拠として、彼は法廷における裁判官と被告と弁護士とは、確かに面的な関係にはあるが、第一次集団を形成しているとは考えられないからであると述べている(12, pp. 42—43)。

また逆に彼は「面的でない集団が第一次集団としての性格を有していることもありはしないだろうか」(12, p. 43)と問を發し、「このような問を考える根拠は十分にある。

それは空間的に広く分散している血縁集団 (kinship group) は、ただ手紙によって連絡をとるけれども、一体的感情をもち、個々人は全体へのある程度の融合を示し、確かに第一次集団の範疇に入れられるからである」(12, p. 43)と述べている。かくしてフェアリスは、成員の空間的接近を必ずしも第一次集団の本質的要素 (essence) とはみず、それを偶然的要素 (accident) と考えるのである。更に彼は統計的集団 (statistical group) ではなく社会的集団 (sociological group) の本質を考える場合には、その成員の体験の内的主観的側面 (inner subjective

aspects of experience) から考えるべきである。客観的・外部的なものをもって集団の本質を考えようとする立場は、行動主義 (behaviorism) 的立場である。そういう立場をとるから偶然的要素と本質的要素を取り違えるのであるとも主張している (12, pp. 44~45)。

では、フェアリスによれば第一次集団の本質的要素は如何なるものであろうか。既述のように集団の本質は、その成員の体験の内的主観的側面から考えなければならないと主張しているところから、当然彼はそれを成員の主観的側面に求めるのである。つまりそれは成員のわれわれ感情 (a feeling of "we") であり (12, p. 45)、その成員を関係に結び付ける情緒的性格 (emotional character) である (12, p. 50)。要するにフェアリスは右のような立場にたつから、「家族は単にともに住んでいるという理由で第一次集団ではなく」 (12, p. 41)、「それは家族成員の關係がみられてはじめて第一次集団となる」 (12, p. 41) のである。W・F・オグバーンとM・F・ニムコフも、フェアリスほどではないが、成員の面接的接触が第一次集団の成立・存続に対して与える影響力を幾分看過している。すなわち「クローリーは成員の間の親密な關係によって特徴付けられる集団を第一次集団と呼んでいる。かかる親密な關係は

通常面接的であるが、常に面接的であるとは限らない」 (14, p. 134)。何故ならば「Robert Browning (男) と Elizabeth Barrett (女) は、お互いに出版した詩を愛読する過程で、二人のロマンチックな關係を發展させていった」 (14, p. 134) ように、「親密な關係は文通 (correspondence) によっても生まれ、且つ維持されることもある」 (14, p. 134) から。

J・S・ルーセックとR・L・ウォーレンが、社会的接触の性質を意味する二つの言葉——同情的接触と範疇的接触——を取り上げ、「同情的接触とは、ある程度の相互理解と他人のパーソナリティ全体への関心とによって特徴付けられる二人以上の人びとのあいだの接触である。範疇的接触とは、その相互作用が人びとの占めている位置によって右左されているような二人の人のあいだの接触である。」と述べている。ところでここで同情的接触及び範疇的接触(彼等は人々の占める位置によって左右される二人の間の接触に限定するが、私は三人以上の場合も認める)の言葉を借り、両接触が第一次集団の成立・存続に及ぼす影響を考えてみる時、同情的接触は範疇的接触よりも遙かに大きい影響力をもっているといえよう。何んとなれば、フェアリス、オグバーン等の挙げた空間的に広く分散している血縁集団や R. Browning と E. Barrett の例は、同情的、面接的接触であつても、第一次集団を形成しているに反し、裁判官と被告と弁護士の場合は、範疇的、面接的接触をするが、第一次

集団を形成していないからである。

ところで、フェアリスにしろオグバーン||ニムコフにしろ、彼等はある特殊例外的な事例を引用し、集団成員の face-to-face という物理的接近性を、第一次集団の成立・存続にとって、あたかも偶然的要素であるかのように主張し、その及ぼす影響力を幾分過小評価しているようである。しかしながら我が国の俗語に「去る者は日々に疎し」とか「遠い親類よりも近い他人」といった言葉があるが、これらの言葉は接近している者の間に生じ易い親密性を物語っているように思われる。従ってわれわれは成員の物理的接近性を、フェアリスが理解したように、第一次集団の成立・存続にとっての単なる偶然的要素とみなすのではなく、むしろかかる集団が成立し存続するための一つの基本的条件と考えるべきではなからうか。それ故デューヴィスの以下にみるような主張が比較的詳しく、且つ正鵠を得ているように思われる。

デューヴィスは先ず第一次結合と第二次結合の間の眞の差異は、集団それ自体にあるのではなく、集団構造を形成している種々の関係にある、と考える (15, p.30)。次いでクリーにはじまる一連の人々の主張は、所詮理念型 (ideal-type) としての集団類型分類のそれであって、第一次的関

係 (primary relationship) と第二次的關係 (secondary relationship) とが、現実の第一次集団にもあるいはまた第二次集団にも、複合的に存在している。しかしながら、第一次的關係が第二次的關係よりも支配的である場合に、われわれは理念型としての第一次集団という名称を、逆に第二次的關係が優越している時には、理念型としての第二次集団の名前を、単に与えているに過ぎないと彼は主張する (15, pp.305—307)。さて、デューヴィスは第一次關係の特質として、(一)目的の一致 (identity of ends)、(二)關係が人格的であること、(三)關係が自然発生的 (spontaneous) であること、(四)關係が感情的 (sentimental) であること、(五)關係が包括的 (inclusive) であること、の五つを挙げ、また第二次關係の特質としては、右の第一次關係の諸特質と鋭く対立する次の五つを列記する。(一)手段の一致 (identity of means)、(二)關係が非人格的であること、(三)關係が契約的 (contractual) であること、(四)關係が合理的 (rational) であること、(五)關係が特殊的 (special) であること (15, pp.294—305)。そして彼は第一次的關係及び第二次的關係の右のような諸特質を生み出す外的乃至物理的条件 (physical conditions) として、前者に(一)物理的接近性 (physical proximity)、(二)集団が小規模であること

と (smallness of the group)。(三)関係が持続的であること (long duration of the relationship)を掲げ、後者には(一)空間的に距離のあること (spatial distance)、(二)集団が大規模であること、(三)関係が一時的であること、を挙げる(15, pp. 290—294, 306)。そして最後に彼は、このような外的乃至物理的条件が伴って、必然的に第一次的関係(第一次集団)若しくは第二次的関係(第二次集団)が生まれるのではなく、これはあくまでも一般的傾向であって、勿論例外もあり得ると結論づける(15, pp. 290—294)。

以上の考察からも明らかのように、デーヴィスは原則としてクルーリーなどの主張する face-to-face の側面や、集団が小規模であることを、第一次集団が成立し存続するための物理的条件として認めている。それ故この点で私は彼の主張には同意するし、E・A・シルズも、集団規模の小さいことや面接集団の關係にみられる肉体的接近などを、第一次集団自体の特徴とは見ず、かかる集団に影響を与える条件と考えている点で軌を一にしている。

① ブルームとセルズニックが「クルーリーが face-to-face の接触を第一次集団にとって、必要欠くべからざるものとみなしたかどうかについては、恐らく意見の分かれるところである」(13, p. 128)と述べているように、私はフェアリスとは見解を異にする。つまり私には、第二節でも述べたように、クルーリー

は第一次集団の本質を、あくまでも成員の親密な結合と共同に求め、成員の面接的接触を、彼等の親密な結合と共同を生む一条件と考えているように思われる。

② J. S. Roucek and R. L. Warren, *Sociology: An Introduction*, 1957 (橋本真・野崎治男共訳『社会学入門』六四—六五頁)。

③ 田中清助、前掲論文、五五頁参照。

五

第二節以下で具体的に検討してきた第一次集団と第二次集団、テンニースの共同社会と利益社会、及び既に筆者が他の稿で明らかにしたマッキーバーのコミュニティとアンシェーション、といった集団類型分類の仕方は、われわれの払ってきた努力の跡からも明らかのように、集団の全体としての性質をある特定の基準——あるものは集団成員の接触の仕方に、あるものは成員の結合のあり方に、またあるものは集団のもつ機能に分類基準を求めていた——から二分法によって両極化し、理念的な類型概念として一般化したものである。けれどもこのような二元的抽象的な分類基準を採用した集団類型学は、今日では多くの人々によって批判されている。例えば欧米では、R・K・マートンが「ある目的からいえば、現在行なわれている第一次集団と

第二次集団、内集団と外集団……アソシエーションとコミュニティ等の分類を用いることは役に立っている。しかしこれらは明らかに集団構造の作用を分析する必要に応ずることのできる理論的に導き出された分類の端緒以上に出るものではない」(18, p. 309)と主張しているし、G・ギュルヴィッチも具体的な集団は決して一元的抽象的把握を許すものではないと批判している。^②また我が国では、金沢実氏が「これまで展開された集団の概念化や分類は、それぞれ特殊な観点にとつてのみ索出的な価値をもつにすぎず、きわめて限界をもった適用範囲に止まり、たとえ論理的に首尾一貫した包括的図式を展開したとしても、それ以上には集団分析の準拠をなすべき一般的フレーム・オブ・レファランスを構成しなかった」と論評している。更に大塩俊介氏も「われわれが、このような類型を歴史的な典型として、また地理的な典型として比較する場合には便利な概念である。しかし複雑な機能上の変化を示す具体的な集団をこれらの類型にそのまま当てはめることは不可能である」^③と述べている。それ故今日では、集団の性質を規定している複雑な因素あるいは次元をそれぞれ指摘して、集団を多元的に分類することが、次第に共通な科学的自覚として要請されるようになってきたのである。因みにここでは

かかる点で努力を払った先学の所説を二、三紹介して——これらを整理して論理的に首尾一貫した分析的範例を掲げること、体系的な集団類型理論の構築をめざす社会学徒に課せられた共通の課題ではあるが、極めて困難な作業であり、本小論の企て及ぶところではない——結びにかえよう。

先ずD・サンダーソンは、つとに一九三八年に雑誌論文「集団記述」(Group Description)を書き、その中で種々の集団類型のカテゴリーを帰納的に発見する手続きを強調している。彼のめざす記述と分類の目的は、単なる分類学(taxonomy)ではなく(16, p. 319)、各集団構造とそれに特有な集団行動における類似(likenesses)と差異(differences)とを識別するところにあるのであって、正確に検証された記述の分析と比較によって、さまざまな集団を区別する基準を発見し、これらの比較分析を通じて集団類型を決定しようとするものである(16, p. 312)。

さて、彼は(一)集団に限界(boundary)を与え、あるいは他の集団成員と区別させるものは何であるかという言わば集団の自己同一性(identity)の問題——集団成員の範囲、集団への加入脱退、集団成員の同一化——をはじめ、(二)構成(composition)すなわち人数と成員の資格、等質性(社会的距離)、成層(stratification)及び永続性(per-

manency)の問題、(三)集団間の関係(inter-group relations)つまり集団が独立自治的であるかあるいは他から統制されているかという問題、(四)集団内の関係(intra-group relations)具体的にいえばメンバーの関係が人格的であるか否か、接触が頻繁であるかどうか、成員の参加度はどの程度か、連帯性(solidarity)はどの程度か、等といった成員間の相互作用の形式、成員の点在する領域、会合場所などの空間的關係、集団が一時的であるか持続的であるかあるいは季節的であるかといった時間的關係、(五)構造(structure)と機構(mechanism)換言すれば一定の機能を営むための手続と成員に対する仕事の割り当ての問題、に至る諸項目にわたって集団記述に必要な概念道具を詳細に展開している(16, pp. 313—316)。なおサンダーソンの場合、このような集団記述の一般的図式の展開は、究極的には人間の福祉(human welfare)をめざす集団技術学(technology)の完成を意図するものであった(16, p. 319)。

次にギュルヴィッチは、社会学を類型学的方法によって社会的現実を研究するものと規定し、社会類型として、

(一)社会的結合類型あるいは結社形式 (types de liaisons sociales ou formes de sociabilité) (二)集団類型 (types

de groupements) (三)包括社会類型 (types des sociétés globales)の三種類を挙げ、それぞれについて多元的な分類基準を設定して、極めて精細な分類を試みようとしていることは広く知られるところである。彼は一五の基準に従って集団をそれぞれ分類しているので(17, pp. 305—354)、次に示しておくが、彼のかかる分類が充分に包括的、且つ相互に排斥的なものであるかどうかについては、大いに検討を必要としよう。

- ① 内容 (contenu) 単機能集団—多機能集団—超機能集団
- ② 容量 (envergure) 小集団—中集団—大集団
- ③ 持続 (durée) 一時的集団—持続的集団—永続的集団
- ④ リズム (rythme) 緩調子の集団—並調子の集団—急調子の集団

- ⑤ 分散の程度 (mesure de dispersion) 遠隔的集団—人為的接触集団—定期的集合集団—常時結合集団

- ⑥ 形成の基礎 (fondement de formation) 事実集団—任意集団—強制集団

- ⑦ 接近の様式 (mode d'accès) 開いた集団—条件的接近集団—閉じた集団

- ⑧ 外部化の程度 (degré d'exteriorisation) 非組織非構造的集団—部分的組織集団—完全組織集団

- ⑨ 機能 (fonctions) 親族集団—類縁集団—地域集団—経済活動集団—類縁集団と経済活動の中間集団—非利益的活動集団—

神秘的忘我的集団

⑩ 指向 (orientation) 分割集団—統合集団

⑪ 包括社会からの浸透様式 (mode de pénétration par la société globale) 包括社会からの浸透に抵抗する集団—包括社会からの浸透に多少とも服従する集団—包括社会からの浸透に完全に服従する集団

⑫ 集団間の一致度 (degré de compatibilité entre les groupements) 完全に一致する同種集団—部分的に一致する同種集団—一致しない同種集団—排他的集団

⑬ 拘束の様式 (mode de contrainte) 条件的拘束集団—無条件的拘束の集団

⑭ 組織を支配する原理 (principe régissant l'organisation)

支配集団—協力集団

⑮ 統一の程度 (degré d'unité) 単一的集団—連邦的集団—同盟的集団

最後にマートンも次のように論究している。「戦略的な集団分類は、集団の属性を組み合わせて導き出されるべきであるという論理的要求に合致しなければならぬとみる点で、社会学者の見解は実質的に一致している」(18, p. 310)。けれども「どの集団的属性が有益な分類の基礎となるかという実質的問題となると、彼等の見解は大きく食い違いを示してくる」(18, p. 310)。この実質的問題はまだ大いに動いているので、ここに集団や組織を扱った社会学上の文献を渉猟し分析して得られた集団的属性の暫定的なり

スト (provisional list) ——これは不完全な草案、もっと正確な表現を用いるならば「草案の草案」——に過ぎないと前置きして、彼は次の二六の集団属性を掲げている (18, pp. 310—324)。

- ① 集団成員資格の社会的規定の明確さあるいは曖昧さ
- ② 成員が集団の営みに参加する程度
- ③ 集団所属の現実的持続
- ④ 集団所属の期待される持続
- ⑤ 集団の現実的持続
- ⑥ 集団の期待される持続
- ⑦ 集団のあるいはその構成部分の絶対的な大きさ
- ⑧ 集団のあるいはその構成部分の相対的な大きさ
- ⑨ 集団の開放的性格乃至封鎖的性格
- ⑩ 「完全性」、現実的成員の可能的成員に対する比率
- ⑪ 社会的分化の程度
- ⑫ 成層の形と高さ
- ⑬ 社会的凝集の類型と程度
- ⑭ 集団分裂乃至融合の可能性
- ⑮ 集団内における社会的相互作用の範囲
- ⑯ 集団内に行なわれている社会関係の性格
- ⑰ 集団規範に対する期待された同調の程度、逸脱的行動の黙認と集団規範の厳格な規定からの制度化された離脱の黙認
- ⑱ 規範的統制の体系
- ⑲ 集団内部における可視性乃至観察可能性の程度

- ②① 集団の生態学的構造
- ②② 集団の自律と依存
- ②③ 集団の安定性の程度
- ②④ 集団の構造連関の安定性の程度
- ②⑤ 集団とその構造連関の安定性を維持する様式
- ②⑥ 集団の相対的な社会的立場
- ②⑦ 集団の相対的勢力

以上の集団属性を挙げた後、マートンは「集団属性の列挙をここで打ち切ること、まったく私の一存である。というのも社会学者がばらばらに研究しているもの、あるいは組織的に研究しているものを合わせれば、なおその数は私がここに挙げた二六の数字を上廻ることになろう」(18, p. 324)と述べ、自分の払った努力は「社会集団を特徴付けるための概念的図式を展開するという、理論上当然要求される目的に向って僅かに一歩進めたものに過ぎない」(18, p. 324)と記述している。そして最後に彼は「今後の集団分類の有用性を実証するに先立って超克されなければならない一つの大きな障害がある。それは今論じている属性の各々について、標準化された尺度 (standardized measures) を展開することが困難だということである」(18, p. 325)と付言し、近代社会学の歴史が未だ極めて浅いに加えて、集団理論の分野における著しい混乱と停滞

性とを率直に認めているようである。

- ① 拙稿「コミュニティ論序説——特に generic community を中心として——」『哲学論集』第一号、昭和三九年、六〇—七八頁。
- ② 野口隆『ギュルヴィッチ社会学の研究』昭和三六年、一七〇頁。
- ③ 金沢実「集団分析の一展開——二、三の方法論的課題をめぐって——」『社会学の問題と方法』昭和三四年、一六〇頁。
- ④ 大塩俊介「集団の構造」『講座社会学』第二巻、昭和三三年、一一八頁。
- ⑤ 野口隆、前掲書、七〇—七一頁。
- ⑥ 同七一—七二頁。

(附記)

本稿を執筆するにあたって私は、池田義祐・清水盛光両先生より極めて有益な示唆を多々受けたので、ここで両先生には心から御礼を申し上げたい。また京都大学文学部図書室で文献を借用する際、心よく便宜をはかってくれた井淵清昭君にも、お礼を述べてひとまず本稿の執筆を終わりたい。

(主要引用文献)

- ① C. H. Cooley, *Social Organization*, 1909.
- ② K. Young, *Social Psychology: An Analysis of Social Behavior*, 1930.
- ③ R. M. MacIver and C. H. Page, *Society: An Introductory Analysis*, 5th impression, 1957.

- ④ M. S. Olmsted, *The Small Group*, 1959.
- ⑤ F. Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft*, 8. Aufl. 1935.
- ⑥ F. S. Chapin, *Contemporary American Institutions: A Sociological Analysis*, 1935.
- ⑦ R. E. Park and E. W. Burgess, *Introduction to the Science of Sociology*, 8th impression, 1933.
- ⑧ G. A. Lundberg, *Foundation of Sociology*, 1939.
- ⑨ A. M. Lee (ed.), *Readings in Sociology*, 5th printing, 1960.
- ⑩ E. E. Eubank, *The Concepts of Sociology*, 1932.
- ⑪ L. L. Bernard, *An Introduction to Social Psychology*, 1926.
- ⑫ E. Faris, "The Primary Group : Essence and Accident," *Amer. J. Social.* XXXVIII, July, 1932, pp.41—50.
- ⑬ L. Broom and P. Selznick, *Sociology*, 1955.
- ⑭ W. F. Ogburn and M. F. Nimkoff, *Sociology*, 3rd ed, 1958.
- ⑮ K. Davis, *Human Society*, 6th printing, 1954.
- ⑯ D. Sanderson, "Group Description," *Social Forces*, vol. 16, March, 1938, pp.309—319.
- ⑰ G. Gurvitch, *La vocation actuelle de la sociologie*, 1950.
- ⑱ R. K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, rev. ed, 1957.